心理学シリーズ番外編<その5>

～T 教授の観察ノートから～

2008.9.10　　タツノオトシゴ

Ｔ教授が書き残した「観察ノート」、まだ先が有りそうです。
チョッと神経質で遊び心がありそうなＴ教授、今日はお昼寝です。

書斎の窓辺で揺り椅子に座り思考に耽っていると、バラの匂いと共に小鳥のさえずりが聞こえてきます。のどかな一日の昼下がり、連日の研究でＴ教授もお疲れモードです。
昨日の出来事に加え、気になることがあるため睡眠時間が不足気味のＴ教授ですが、この日は予定もなく、久しぶりにまどろむ事が出来ました。そして、教授は夢の中で不思議な体験をすることになるのでした（^^；

あたり一面のお花畑、空中から眺めると何処までも果てしなく広がっているようです。黄色の花が咲いている中に、一箇所だけ、藤色の花がかたまって咲いている場所が見えてきました。近づいて観察すると、小さな花が無数にくっ付いています。そのとき、花の一つが動いたような気がしました。でも、じっと見ていても花が動くはずはありません。
わざと、別の方向を見ていると、又、花が動いたような気がしました（^^；
今度は手に持っていた小枝で、花の一つひとつを触ってみました。

すると、おかしな生き物が空中に飛び上がってきました。体中が紫色のイボイボで出来たトカゲか蛙みたいな生き物です。空中をふわふわと散歩し、別の花の方へと移動していきます。目玉がまるで花の一つのようで、手で掬い上げようとしても捕まえることが出来ません。丁度、水中を泳ぐ小魚を、手で掬おうとしているような感じです。「これは新しい種類の生物のようだ。皆に証拠を見せなくてはいけない」と考え、何度となく捕まえようとしても全く駄目でした。「お～い！誰か網を持って来てくれないか？」と後を振返っても誰もいません。そのうちにバランスを崩し、お花畑の中に落ちて行くところで夢から覚めたようです。

教授のメモにはこんな記述が残っていました。

おかしな夢の原因は、あの日の晩に嗅いだ匂いが関係しているようだ。

あの煙には、何か脳の中枢を麻痺させる働きがあるのでは・・・

そのとき、書斎のドアを誰かがノックし、聞き覚えのある声がしています。

「T教授、チョッとお邪魔してもよろしいでしょうか？」と健さんが訪ねてきたようです。教授が「健さんか、かまわんから入りたまえ」と返事をすると、健さんがドアを少し開いて顔を出してきました。部屋の中に他に人がいないのを確かめ、安心して入ってきました。健さんは、「実は、先生にチョッとご相談したいことがあったものですから」と言って、部屋の隅で立っています。教授は「そこの椅子にでも腰掛けて、話を聞こうではないか」と言って、部屋の中央にある応接セットに腰掛け、健さんにも座るよう促しています。

健さんの普段とは違う様子を気遣いながら、教授は慎重に話しかけます。

T 教授：「何か新しい発見でもあったのかね？」　意外と健さんに気を使っています。

健さん：「実は、夕べも例の音が聞こえてきたのです」　T 教授は黙って頷いています。

「５分ぐらいして音が止み、次にＳ婦人の部屋の窓が開くような音がしました」

T 教授：「あの部屋の窓は古くなってきているから、周りによく響くのだなぁ…」

健さん：「そして、夜中に誰かが窓の下に来たようなんです」　T 教授の顔を伺って…

「夕方に降った雨で、地面がぬかっていたので足跡が残っていました」

T 教授：「なるほど、私も気になることがあって、昨晩散歩していたのだが…」

「多分、たまに見かける庭師のあの男だとすると話の辻褄が合いそうだ」

健さん：「それじゃ～ぁ、教授はあの男と会ったのですか？」

T 教授：「昨晩、偶然だけれど離れの小屋で灯りが点いているのを見かけたのだよ」

「S 婦人のことは余り心配しなくても良い、此処に長く住んでいることだし…」

健さんは、しばらく黙って聞いていましたが、又何か聞こうとしています。

健さん：「近所の話で聞いたのですが、S 婦人の所に『水晶どくろ』という不思議なものがあるって本当でしょうか？」

T 教授：「私も実物は見せてもらったことはないが、その話は何度か回りから聞いている」

「それほど大きくはないが、実に精巧に出来ているという噂だ」

健さん：「S 婦人の所に来る人たちは、何か不思議な繋がりがありそうですね」　「この前も、日出彦さんがお医者さんのような人達に出会ったと言っていました。」

T 教授：「ところで、健さんは遺跡やギリシャ神話に興味を持っているようだが、どんな所を研究してみたいのかね？」

健さん：「今は、スフインクスの謎について、関係資料を調べているところです」

「やはりオイディプスの謎解きや、デルポイの神託に関する辺りが面白くて…」

T 教授：「それじゃ今度の研究が終わったら、早速ウイーンに勉強に行くと良いだろう」
「ウイーンでは新しく研究を始めた人たちが多く集まってきているはずじゃ」
健さん：「そういえば、先生も以前はよく行かれていましたよね」
T 教授：「最近では、ドイツからも学者が集まってきているし、皆研究熱心なメンバーだ」
「これからの時代、特にこの分野は君たち若者の時代が必ずやってくる！」
しばらくして健さんは自分の部屋に戻って行きました。

日記には「健さんの夢」に関するメモ書きも残されています。
健さんは強靭な精神力を持っているが、時々不安定な状況が訪れてくる。夢の中の匂いは「鋭い直観力」を表し、高い煙突や塔に登るのは「精神的な力」と「高い地位や支配」への憧れだろう。心理的な葛藤が戦いの中に見受けられ、『悪魔』という「暗い本能的な力」や「障害への葛藤」の象徴が現れている。しかし、「黒猫の目」に見受けられる『太陽神』の象徴のような「強い自我」が現れており、最終的には混乱から抜け出して自分の道を見つけ出すことが出来、強い精神力を持ち合わせている彼なら、新しい発見が期待できる。

＜今回はギリシャ神話の HP よりからスフインクスに関する記述をピックアップ＞

スフィンクスはムーサより謎を教わって、ピーキオン山頂に座し、そこを通るものに謎を出して、謎が解けぬ者を喰らっていた。この謎は「一つの声をもちながら、朝には四つ足、昼には二本足、夜には三つ足で歩くものは何か。その生き物は全ての生き物の中で最も姿を変える」というものであった。この謎が解かれた時スフィンクスの災いから解放されるであろうという神託をテーバイ人達は得ていた為、この謎を解くべく知恵を絞ったが何人も解く事は出来ず、多くの者がスフィンクスに殺された。（一説によるとクレオンの子ハイモンもまたスフィンクスに殺された）この為クレオンは、この謎を解いた者にテーバイの街とイオカステを与えるという布告を出した。テーバイに来たオイディプスはこの謎を解き、スフィンクスに言った。「答えは人間である。何となれば人間は幼年期には四つ足で歩き、青年期には二本足で歩き、老いては杖をついて三つ足で歩くからである」謎を解かれたスフィンクスは自ら城山より身を投じて死んだ。これは謎が解かれた場合死ぬであろうという予言があったためである。（悔しさのあまり身を投じたという説もある）

では、次回もお楽しみに（^^；